

平成29年度第2回  
東京都江戸東京博物館資料収蔵委員会  
資料収集部会

平成30年1月25日（木）  
東京都江戸東京博物館 2階会議室

午前9時54分開会

**富岡文化施設担当課長**：大変お待たせいたしました。皆様おそろいですので始めさせていただきます。

改めまして、本日は大変お忙しい中、御出席いただきまして、どうもありがとうございます。

ただいまから「平成29年度第2回東京都江戸東京博物館資料収蔵委員会 資料収集部会」を開催いたします。

私は、東京都生活文化局文化振興部文化施設担当課長の富岡と申します。議事に入りますまで司会を務めさせていただきますので、どうぞよろしく願いいたします。

初めに、東京都生活文化局文化施設改革担当部長の鈴木から御挨拶を申し上げます。

**鈴木文化施設改革担当部長**：東京都文化振興部の鈴木でございます。いつも大変お世話になっております。

本日は、半世紀ぶりの寒さという中で、大変お寒い中、御出席いただきまして、まことにありがとうございます。

今回は、本年度第2回目の収蔵委員会ということでございます。昨年10月に第1回をやらせていただきまして、そのときに御審議いただいた購入作品、全部で320点につきましては、既に江戸博のほうで購入させていただいているところでございます。

今回は、購入資料全部で402点に加えまして、それ以外にいろいろと御寄贈のお申し出を頂戴している作品、そうした173点を含めて本日お諮りさせていただければと思っております。

江戸博に所蔵する作品として妥当であるかどうか、ぜひ皆様方の専門的な見地から見ていただきまして、御審議を頂戴できればと思っております。

昨年10月から江戸博は改修工事に入っておりますけれども、この間もこうした形で収蔵作品の拡充というものは着々と進めさせていただきまして、今後の2020年大会、また、それ以降を視野に置きまして、引き続き国内外に江戸博のすばらしさを発信できるコレクションを充実させていければと思っておりますので、引き続きどうぞよろしく願いいたします。

本日はどうぞよろしく願いいたします。

**富岡文化施設担当課長**：続きまして、江戸東京博物館の藤森館長から御挨拶を申し上げます。

館長、お願いいたします。

**藤森館長**：収蔵品の収蔵担当によりますと、今回は立体物の収蔵が少ないようです。展示のことを考えますと、展示に利用しやすい資料が収蔵できればということもありますので、よろしく御審議をお願いいたします。

**富岡文化施設担当課長**：ありがとうございます。

次に、本日出席いただいております委員の皆様を御紹介させていただきます。私の向か

って左側から順に紹介させていただきます。

まず、大口委員でございます。

中村委員でございます。

松尾委員でございます。

神谷委員でございます。

山梨委員でございます。

植木委員でございます。

小島委員でございます。

金子委員でございます。

なお、本日、森委員につきましては事前に御欠席との御連絡を頂戴しております。

続きまして、事務局職員を紹介いたします。

事業企画課長の飯塚でございます。

それでは、これから議事に入りたいと思っておりますけれども、まずは今回も委員長、副委員長を選任したいと思います。当部会の委員長、副委員長は、委員の皆様の互選で定めるということになってございます。

まずは委員長の選任をお願いしたいと思いますけれども、皆様いかがでございましょうか。

**松尾委員**：第1回目と同じように大口先生をお願いしたいと思いますのですが、いかがでしょうか。

**富岡文化施設担当課長**：皆様、大口先生、いかがでございましょうか。

（「異議なし」と声あり）

**富岡文化施設担当課長**：大口先生、よろしいでしょうか。

**大口委員**：はい。

**富岡文化施設担当課長**：それでは、大口先生に委員長をお願いしたいと思います。

続きましては、副委員長の選任をお願いしたいと思いますのですが、いかがでございましょうか。

**小島委員**：金子委員を推薦したいと思います。

**富岡文化施設担当課長**：金子委員の推薦がございましたが、皆様、いかがでございましょうか。

（「異議なし」と声あり）

**富岡文化施設担当課長**：金子先生、よろしいでしょうか。

**金子委員**：はい。

**富岡文化施設担当課長**：ありがとうございます。それでは、副委員長は金子委員をお願いいたします。

大変恐れ入りますが、大口委員、金子委員、お席の移動をよろしく願いいたします。

（大口委員、委員長席へ移動）

(金子委員、副委員長席へ移動)

**富岡文化施設担当課長：**それでは、委員長に進行をお願いします前に、当部会の公開について説明をさせていただきます。

当部会ですが、東京都江戸東京博物館資料収蔵委員会設置要綱第12の規定によりまして、原則公開となっております。そのため、委員の皆様のお名前と現職名は東京都のホームページ上にて公開をさせていただきます。

今回の議事内容の公開につきましては、前回の第1回の部会で既にお諮りしてございまして、中身としましては、資料収集決定前の審議の段階で対象資料の詳細を公開することによりまして、現在の資料所有者に不利益を生じさせるおそれがあるということ、また、資料の実物確認においては所有者から説明の参考用に借用しているということから、議事内容は、本日の段階では非公開として、議事録により公開するという結論になってございます。

なお、当部会の議事録の公開に当たりましては、委員の皆様事前に確認させていただいて、その上で公開したいと思っております。

それでは、大口委員長、金子副委員長、議事の進行をどうぞよろしくお願いいたします。

**大口委員長：**大口でございます。

それでは、早速、議事に入りたいと思います。

今、課長のほうから説明がありましたように、この会の議事内容は、前回のときに非公開ということで確認しましたので、前回どおり非公開でスタートしたいと思います。

最初に、事務局のほうから今年度の資料の収集方針と、本日審議いたします収集予定資料の説明をお願いしたいと思います。よろしく申し上げます。

**飯塚事業企画課長：**では、説明をさせていただきます。

説明の前に、お手元の資料の御確認をお願いいたします。

まず、一番上に会議次第がございます。

続きまして、資料1、「委員名簿」がA4で1枚ございます。

資料2、「収蔵委員会設置要綱」がA4で2枚ございます。

資料3、「東京都江戸東京博物館資料収集具体的方針」がA4で1枚ございます。

資料4、「平成29年度東京都江戸東京博物館の収蔵品購入に関する方針について」がA4で1枚ございます。

資料5、「平成29年度第2回資料収蔵委員会（収集部会）説明資料」がA4で3枚ございます。

資料6、「平成29年度第2回資料収蔵委員会付議資料」がA3の横判で、21までナンバリングしている資料がございます。

なお、お配りしました名簿に誤りがございましたらば、恐れ入りますが、後ほど事務局へ御連絡いただけますようお願いいたします。

また、お手元の資料につきましては、現時点では未公開の情報が含まれておりますので、

会議終了後、回収させていただきたいと存じます。よろしく願いいたします。

それでは、今年度の資料の収集方針を御説明いたします。資料3をごらんください。

まず、本資料にございますように、「東京都江戸東京博物館資料収集具体的方針」にのっとりまして、当館の展示及び研究に供する資料を収集する方針をとっております。

続きまして、資料4をごらんください。こちらの資料は平成29年度の収蔵品購入に関する方針について記載してございます。今回は、この方針の中でも特に3つの項目に重点を置き、資料の収集を図りました。

第1に、購入方針の2に基づきまして、江戸東京の歴史と文化の魅力を国内外に発信できる資料でございます。

第2に、方針3（1）に基づき、常設展や継続的事業に繰り返し生かすことが可能な資料でございます。

第3に、方針3（3）に基づきまして、2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向けて、海外からの来訪者が東京の文化的魅力を感じることができる資料でございます。

続きまして、今回御審議いただく資料について説明いたします。A3サイズ横判の資料6をごらんください。今回は委員の皆様へ審議していただく案件と報告事項の2件がございます。

審議案件につきましては、購入を予定している資料及び寄贈を予定している資料でございます。資料の内容は、この後詳しく御説明いたします。

また、2の報告事項でございますが、平成28年度の図書の中でも定期刊行物の購入状況について報告させていただいております。

それでは、資料を2枚おめくりください。3枚目の紙の右下に1とナンバリングがございます。このページが今回の付議資料の総括表でございます。付議資料の点数は、購入資料が402点、寄贈資料が173点、合計575点でございます。

まず、購入資料の内訳は、標本資料が397点、映像音響資料が5点でございます。分類別では、標本資料のうち絵画が391点、生活民俗が1点、典籍が2点、印刷物が3点でございます。映像音響資料は、静止画が5点でございます。

次に、寄贈予定資料の内訳は、標本資料が154点、映像音響資料が19点でございます。分類別では、標本資料のうち絵画が11点、書籍が3点、工芸品が6点、生活民俗が73点、典籍が1点、文書類が51点、印刷物が9点でございます。映像音響資料は、静止画が19点でございます。

この後のページに購入資料、寄贈資料の順で入手先別と分類別の点数を一覧表にしてございます。

続きまして、主だった資料について個別に御説明いたします。A4縦判の資料5をごらんください。

また、先ほどごらんいただいたA3横判の資料6の4ページ以降に資料リストを記載しております。その表の左端にNo.と書いてある5桁の番号が説明資料の番号と同じ番号ですの

で、あわせて御参照いただければと存じます。

では、購入資料から説明いたします。

「1. 浅草寺図」でございます。A3の資料リストでは4ページの説明番号No. 1に当たります。

これは歌川派の始祖である歌川豊春によって江戸後期に描かれたものでございます。画面の左に本堂を大きく配し、中央には隨身門を、右手前には手水場を、奥には五重塔を描いております。豊春は、浮絵という透視図法を使用した風景表現を取り入れ、多様な画題と画面構成を実現しましたが、本図もその一つでございます。桜の季節に参詣する群衆とともに、本堂大屋根に巣をつくるコウノトリなど多数の鳥が描かれています。また、本堂の大提燈に「豊竹肥前」と書かれており、これは義太夫節の太夫である肥前座の座元の名前でございます。汚れはございますが、全体としての色彩は鮮やかで、浅草寺を描いた肉筆の大作です。常設展示「江戸の美」「江戸の四季と盛り場」で活用が見込まれます。

続きまして、「柴田是真絵様手控類」でございますが、説明番号はNo. 2、No. 3に当たります。

これは、幕末から明治にかけて活躍した絵師であり、蒔絵師である柴田是真の作品の下絵や図案類など166点と版画や刷版類160点でございます。是真の三男である梅沢隆真が所持していたと伝わっています。画題は人物や風俗、風景など多岐にわたっており、中には関東大震災で焼失した大絵馬の下絵や、応挙や抱一などの作品を写したもの、蒔絵等の図案と思われるものも含まれています。さらに注文主と思われる人名が記されている画幅もあり、資料性が高いものです。これらは是真の作品研究に資するとともに、当時の江戸の士民の美意識を理解する素材ともなります。常設展示「江戸の美」などで活用が見込まれます。

次のページに移ります。

「3. 錦絵揃物2種『末広五十三次』『中村芝翫九変化之内』」でございます。説明番号はNo. 4とNo. 5でございます。

「末広五十三次」は、東海道の五十三の宿場に日本橋と京都を含めた55枚の揃物で、長州征伐に上洛する十四代将軍徳川家茂の行列を主題にしています。二代広重、芳年、貞秀ら8人の絵師による合作で、13の版元による共同出版です。幕末の慶応元年閏5月に刊行されました。名所の風景の描写は従来の東海道の錦絵に倣いながらも、洋式の兵隊や銃などが描かれています。常設展示「江戸から東京へ」などでの活用が見込まれます。

また、「中村芝翫九変化之内」は、後の四代目中村歌右衛門になる二代目中村芝翫が天保4年(1833年)3月に中村座で上演した変化舞踊「奥九重弥生花道」を描いた錦絵です。9枚揃いの錦絵は珍しく、常設展示「芝居と遊里」などで活用できます。

4番目は「慶応元年遣欧使節肖像」です。A3の収集予定リストでは7ページ、説明番号No. 1～5に当たります。

外国奉行柴田日向守剛中を特命理事官とする使節は、横須賀製鉄所設立にかかわる交渉

のため、慶応元年閏5月5日（1865年6月27日）にフランスへ赴きますが、その際イギリスへも赴き、造船所などを見学し、慶応2年1月19日（1866年3月5日）に帰国しました。この肖像写真は1866年1月、ロンドンのハーバート・ワトキンスのスタジオで撮影されたものです。柴田剛中、水品楽太郎、小花作之助、塩田三郎、福地源一郎の5人の写真で、写真の裏側に、名前と日本での肩書が英語で記されています。

幕末期の遣欧使節・遣米使節が海外で撮影した写真は幾つか存在しますが、慶応元年の使節の写真は珍しく、また、当館では遣欧使節の写真はこれまで収集しておりません。この資料は常設展示「江戸から東京へ」などで活用が見込まれます。

続きまして、寄贈予定資料の説明に移ります。説明資料の3ページをごらんください。

1番目の資料は「亀戸梅屋敷関係資料」です。A3の収集予定資料リストでは、標本資料は11ページの説明番号No. 1～23、映像音響資料は18ページのNo. 1～3に当たります。

一般に亀戸梅屋敷と呼ばれる清香庵は、代々喜右衛門を名乗る安藤氏が明治期まで守ってきました。これは、その子孫の家に伝来した26件の資料です。八代将軍の徳川吉宗が鷹狩りの際に清香庵を御膳所として利用したことから、喜右衛門は綱差役となり幕府から扶持をもらうようになります。さらに銘木「臥龍梅」の実を江戸城に献上することが許されました。そのことを示す古文書や御用看板、出入鑑札、「臥龍梅」の写真や絵はがきなどが含まれています。当館所蔵の歌川広重の錦絵「名所江戸百景 亀戸梅屋敷」とあわせての展示や、幕府と近郊農村との関係を示す展示に活用が見込まれます。

2番目の資料は「六世尾形乾山（浦野乾哉）の作陶」です。説明番号は、資料リスト15ページのNo. 136～141に当たります。

この資料は陶芸家の浦野乾哉が作った陶器6点です。浦野乾哉は、幕末維新期の名工三浦乾也の弟子で、尾形乾山の子孫とされる尾形白圭の養子となり、六世乾山の名跡を継ぎました。乾哉の弟子には富本憲吉やバーナード・リーチがいます。乾哉は、今戸焼職人だった金沢春吉の姉イセを妻としていましたが、イセが早くに死去したため、下岡蓮杖の娘を後妻に迎えました。その後も尾形家とイセの実家である金沢家の交際は続きました。本資料の寄贈者は金沢春吉の曾孫に当たり、金沢家に伝わる六世乾山の作品として大変重要です。

なお、当館では金沢春吉の今戸焼関係資料約170点の寄贈を受けています。

続きまして、3番目の資料「府川家資料」です。説明番号は、標本資料がリスト11ページから13ページのNo. 26～69で、映像音響資料が18ページのNo. 12と13です。

この資料は幕末から昭和初期まで三代続いた彫金師である府川一則の家に伝来した資料です。初代の府川一則は、葛飾北斎晩年の弟子で、北斎亡き後彫金の道に入り、幕府・諸侯や皇族の注文を受けて主に刀装具を手がけました。その後、一則の二人の息子が二代と三代を引き継ぎ、彫金界で重きをなしました。当館は、三代一則の御遺族から注文帳や彫金道具など約600点に上る資料を寄贈されており、「府川家資料」は近代日本金工史をあらわす重要な資料となっています。今回寄贈いただく資料は、既収集の資料の中で不足して

いた二代一則に関連する資料のため、府川家の資料をさらに充実することが可能になります。

続きまして、4番目の「裁縫雛形」を御説明します。説明番号は、資料リスト13ページから15ページのNo. 84～131です。

これは大正11年（1922年）に東京裁縫女学校高等科（現東京家政大学）で学んだ寄贈者の母がつくった裁縫雛形33点と授業ノートなどです。裁縫雛形は、実物大の3分の1に縮小されており、伝統装束から和装、最新の洋服までバラエティーに富んでいます。特に洋服の雛形はミシン縫いが施されていることから、当時ミシンが普及し教育現場でミシンを指導していたことがわかります。寄贈者の母は、女学校を卒業すると裁縫の教職につき、22歳で結婚するまで教鞭をとりました。これらは大正期の裁縫に関する教育を具体的に知ることができる良質な資料です。

最後に5番目の「今泉邸関係資料」を御説明します。説明番号は、資料リスト13ページのNo. 70～82です。

これは寄贈者の父である今泉廣造氏が購入した宅地や家に関する資料です。池田侯爵邸の跡地である備前山（現池田山）に関するもので、この地の近隣には美智子皇后の実家の正田家があります。箱根土地株式会社は、華族の旧所有地などまとまった土地に道路を作り、区割りして分譲販売し、東京で住宅地開発を行いました。福島県に生まれた今泉廣造氏は、東京で就職し借家住まいをしていましたが、昭和7年（1932年）に本分譲地の一区割りを購入し、翌年に家を建てました。当館では、平成23年度にも今泉邸の図面やその生活を写したフィルム等の寄贈を受けており、これらの資料から昭和初期の東京での住宅を入手する過程やそこでの暮らしぶりを知ることができます。

以上のように、今回、既に収集している資料をさらに補完し充実できる資料を御寄贈いただける見込みとなりました。これは資料を着実に保存し、常設展示や企画展「市民からのおくりもの新規収蔵品展」で公開するなど、これまでの当館のコレクションに対する取り組みを御評価いただいている証と考えられます。

説明は以上でございます。

**大口委員長：**ありがとうございます。

ただいま、本日審議する収蔵予定の資料についての全貌と、そのうち主要な資料の説明をいただきました。我々はこれから実際の資料を見に行きますけれども、その前に今の説明で何か前もって伺っておくこと、質問等がありましたらお願いします。よろしいでしょうか。

それでは、早速、資料を見に行きたいと思います。よろしくお願いします。

（委員離席）

（資料実見）

（委員着席）

**大口委員長：**それでは、皆さんおそろいだと思しますので、議事を再開させていただきます



す。

資料をごらんになって、それぞれ何か御意見、あるいは質問がございましたらお願いします。

前は右側から始めたので、きょうは左側で小島委員からお願いします。

**小島委員：**ちょっと心の準備ができておりませんでした、拝見いたしまして、今回もバラエティーに富んだ興味深い資料ばかりで大変良い収集ではないかと思いました。

個人的に少し関心を持ったものについてコメントさせていただきますと、まず、1番に出ていた「浅草寺図」ですけれども、これは非常に大きな寺院境内の参詣風景を描いた詳細な風俗画として大変価値が高いのではないかと思いました。ただ、制作の目的などがいまひとつまだよくわかっていないようですので、その辺のところをこれから収集して、また詳しく研究し紹介していただければと思った次第です。

それから、番号がよくわからなくなっていますけれども、寛政年間の内裏図が絵図関係で出ておまして、江戸と京都ということはよく比較対象にもなりますので京都の絵図があってももちろん良いと思いますし、最近当館でも一度内裏の図を展示したのですけれども、今回見たものも非常に記述が詳細で細部までわかるという点で資料的価値が高いと思います。例えば公卿が集まって会議をする左近陣座というところが紫宸殿の横の廊下につくられるのですけれども、そういった記述もしっかり描いてあって、横に大臣宿所とかその関係の記述もありましたので、いろいろなものと比較することでさらに価値が増してくる良い資料ではないかと思いました。

それから、絵画関係では五十三次の図が長州征討のときの幕府軍を描いたものということで、非常に時事性の高いこういうものも浮世絵の一つの役割なのだということでかなりインパクトのある作品だと思います。

大量の絵師を動員してつくったという浮世絵制作の体制とか組織に係る点でもおもしろいと思いますし、結局こういうものを売れるからつくったということで、これが非常に需要のある作品だったという民衆側の見方というところまでこういったところから語れると思いますので、これもとても良い資料だと思います。

それから、六世尾形乾山の陶磁器、館長さんがおっしゃっていた立体物がまさにはまって、これもなかなか目を引く良いもので、私も寡聞にして知らなかったのですけれども、向島のほうで陶磁器の生産が非常に行われていたということで、余り一般には知られていないかと思うのですけれども、やはりこういった京都に発するものを江戸でもつくって、それが江戸後期に文人・市民の中でまた珍重されていくという、京都の繁栄あるいは中世の繁栄を江戸時代の江戸が受け継いだのだという意識が江戸後期に非常に高まってくるということが背景としてもあると思いますので、窯業生産ということはもちろんですし、そういった文化的な背景を語る上でもこれは非常に興味深い資料ではないかと思って拝見しました。

それから、主な作品のほうには出ていないのですけれども、風船爆弾に関する資料が出

ておりまして、あれは時々目にして私も非常に興味深く思っているのですけれども、今回も写真と寄せ書きが寄贈として出ておりまして、こういったものも現在、戦争体験を持つ方がだんだん少なくなってきました、聞き書きなどをする機会もどんどん減っておりますので、可能であればぜひ所蔵者に対する聞き書き等も含めてこういったものを資料として蓄積していただくととても良いのではないかと思います。やはりこういう戦争の愚かさというものをきちんと記録して伝えていくというのも非常に重要な役割だと思っておりますので、ぜひそういったところも資料収集に際して御留意いただければと思った次第です。

とりあえず以上でございます。

**大口委員長：**それでは、お願いします。

**植木委員：**いつものことだと思うのですが、大変幅広いジャンルにわたる資料を収集されているのだなというのがよくわかります。その中でも「浅草寺図」、「亀戸梅屋敷関係資料」というのがありました、これは江戸の名所ですね。そういう意味で江戸東京博物館に非常にふさわしい資料ではないかと思いました。

さらに、「末広五十三次」、「慶応元年遣欧使節肖像」の2点に関しては、まさしく江戸から東京へという時代をあらわすものですよね。これもまた江戸東京博物館に大変ふさわしい資料だと思いました。

「慶応元年遣欧使節肖像」ですが、よく見ると、5枚あったかと思うのですが、2人靴を履いていましたね。そういうのも、和装でありながら靴だけ既に洋の部分を取り入れているということで非常におもしろく見せていただきました。

それから、第三部会に属する資料についてお話しさせていただきたいのですが、今回2件あったかと思うのです。「夜着」と「裁縫雛形」です。「夜着」に関しては、こちらの博物館の所蔵品検索というので見せていただきますと、既に1点収蔵していらっしゃるようなのです。それは江戸後期から江戸末期と書いてありました。今回収集されたのは多分明治に入ってからのものだと思うのです。それで大分雰囲気が変わったりしますので、夜着の歴史的なことも1点だけだとよくわかりませんが、江戸後期と明治のものがあるということで時代的な変遷などもよくわかるのではないかと思います。

それから、夜着の文様が孔雀ということですが、表現の仕方として、羽は確かに孔雀の羽なのですが、何か顔が鶴かなという感じがいたしました。

「夜着」全般を見ても、吉祥文様を表現するものが非常に多くて、その中でも特に松竹梅鶴亀が多いようなのです。その中で、ちょっと表現がどうかと思いますけれども、孔雀というのは珍しいものではないかと思いました。

あと、「裁縫雛形」のほうですが、大正11年ということですね。本当に当時の裁縫教育の実情がよくわかる資料だと思うのです。当時まだ既製服が普及していない時期ですから、一家の主婦が家庭のものを全部賄って自分でつくるといふことかと思うのです。単に裁縫ということだけではなくて、見せていただいたものの中に公家装束の桂着、それから、大工さんなどが着る股引きと脚絆などもありましたよね。それはあまり実用ではないもの

だと思っております。でも、そういうものもしっかり裁縫の仕方を学ぶということから衣服全般を学ぼうという姿勢が見えているのかと思えました。それで、桂着なども相当精巧につくられているのに関心いたしました。

以上です。

**山梨委員：**どの資料も非常に状態も良く、楽しませていただきました。

絵画資料について申しますと、先ほどから話題に上っております浅草寺でございますけれども、肉筆、大幅で見栄えも非常にするもので、状態も良いものと思えました。

本堂前なのですかね、武家の女性の群像がいると思うのですけれども、そういうふうな図像の意味ですとか、鳥が非常に多いわけですが、そういうものの意味が今後また解明されると、さらに浅草寺というのがどういうふうな寺院であったかというのがわかっておもしろいかと思っております。

それから、2番の是真の手控ですけれども、やはり柴田是真というのは江戸の美術の中では非常に重要な作家さんなので、その制作の背景というのがわかる大変良い資料だというふうに感じました。あれがまとまってこちらの館に入るといのは大変意義深いものと思えます。

それから、錦絵なのですが、「末広五十三次」は先ほど来も話題になっているのですけれども、美術的に申しますと、やはり歌川派の明治初期の作家さんが皆さん参加して描いている。その中でそれぞれの作家の画風というのがそれぞれに表れていて、そこがとてもおもしろいなというふうに思いました。

歌川の中でも国芳の一派というのはアメリカだけ強いかなと思っておりますけれども、西洋風のものも受容している作家というふうにご覧しておりますけれども、四民平等と言われる世の中に移っていくというふうなことに対してどういうふうなスタンスで作家が臨んだかということまでも画風から透けてくるようなところがありまして、非常に興味深く拝見させていただきました。

それから、5番の芝翫の九変化の図ですけれども、中村芝翫、歌右衛門というのは今まで続いてきます歌舞伎の女形の非常に大きな役者さんでございますけれども、状態も良くて非常に楽しませていただきました。

この天保の頃の芝翫さんというのがどういうお顔の方かわからないのですけれども、先代ですか、先々代の芝翫はやはり顔がちょっと長くて、顎が不正咬合だったのですけれども、そういうふうなところが見られて似絵な部分もあるのかなという、役者絵としておもしろい作品と思って拝見いたしました。

それから、慶応元年のプリントですが、大変状態が良くて驚きました。歴史的にも非常に重要な資料でありますとともに、プリントの状態も大変良いので、ぜひ表裏デジタル化をして活用にご覧いただけましたらありがたいと思っております。

それから、六世乾山ですけれども、琳派というのが富本憲吉とか近代の作陶につながってくるということをお知らせ非常に具体的な資料として興味深く拝見いたしました。江戸か

ら東京へというものを表す資料として、こちらの収集に非常にふさわしいものと思いました。

以上でございます。

**大口委員長**：ありがとうございました。

では。

**金子副委員長**：最初に乾山を拝見したのですけれども、そんなに残っていない人の作品ですので、サントリー美術館の展覧会で似たものが出ていたのですが、あれはうっすらと覚えているぐらいですけれども、非常におもしろい資料だと思います。

最初、リーチが1910年に日本にやってきて、あの会は何でしたか、最近しゃべろうと思うとわからなくなるのですけれども、楽焼の会で、版画家だったのですけれども楽焼に感激して陶芸家になる第一歩ですよ。それで乾山のところへ弟子入りして焼物を勉強しようと思って学ぶのですけれども、英語だけなので、日本語がまだあれだったので、ちょうど富本がイギリスから帰ってきたばかりで英語ができるので通訳を富本に頼んで、逆に今度はリーチと富本の交流が始まるという、日本の陶芸家という作家が出てくる歴史的な瞬間をその3人で演出するわけです。

それで、富本は奈良へ帰って、リーチはイギリスへ戻って、産業ではない作家の表現の陶芸が始まっていくという非常に重要な歴史の結び目に位置するのがこの乾山なのです。乾山が別に近代的な陶芸を推進したとかそういうことはないのですけれども、そこに集まったわけです。

富本はあまりそういうことを言わないのですけれども、リーチは七世乾山ということで、細かい関係はよくわかりませんが、佐野乾山問題でもリーチはずっと本物だという主張を死ぬまで変えないのです。本まで出したりするので、相当交友関係は深かったのではないかと思います。工芸論とか陶芸に対する考え方とか近代的な何か新しいものに影響を与えたとかそういう人ではないのですけれども、近代陶芸の二大巨匠を育てたということになりますね。非常におもしろい時代の物で、その物があまりなかったもので、これは大変貴重な物だと思いますし、すごくうらやましいコレクションだなと陶芸美術館の館長としては思います。

先ほどおっしゃっていた向島のほうで物をつくっていると。関係はよくわかりませんが、やはり隅田焼というのがありまして、宮川香山の超絶技巧よりももっとどぎつい、今は超絶技巧なんて嫌な言葉ですけども、そういう言い方で話すので、そのほうがコミュニケーションがとりやすいので僕は言ってしまいますけれども、そういうような一連の人がいて、井上家というのがそこにありまして、その後東京の板谷波山を中心にした東陶会の中心メンバーになっていくという人たちがその中から出てくるので、それとの関係を、それと今戸焼はこの館で随分持っていらっしゃるわけですよ。その関係は横のつながりが見えてくると大変おもしろいなと思いました。

それから、今日僕が一番気になったのは、8番の東京復興記念の英文の図録ですか、1930

年（昭和5年）のあれを見てみますと、れんがとコンクリートの洋風の建築がだあっと並んでいるのを見ますと、これは本当に個人的な趣味で恐縮ですけれども、昭和5年に封切りされた小津安二郎の映画に「その夜の妻」という全部洋風な空間で埋めていて、新しいアパートの部屋の空間もハリウッドの本物のポスターをべたべた張ったり、ネクタイに背広を着てソフト帽をかぶった、これは主人公の銀行強盗をする人なのですけれども、その銀行強盗のやる場面がみんなれんがづくり、コンクリートの空間を警察が追いかけていくというような空間なのです。ああいう撮影が可能になったのは、復興して記念の年だったのですかね、そういう関係があったのかなと今日初めて思いましたけれども、その小津安二郎の映画の中にはヨーロッパの綿をくるんだ人形がいっぱい出てくるのです。綿をくるんだ人形をつくるということが人形の近代化の出発点で、それが昭和5年に展覧会を資生堂ギャラリーでやっているのです。その中心人物が竹久夢二で、そこから人形作家というのがその刺激でだあっと生まれてくるという経過になっていくわけです。だから、昭和5年というのはそういう復興記念の盛り上がった時期だったのかなと、あれを見て思いました。この間、人形の話をしたときに小津安二郎の映画を映したばかりなので非常に印象が濃かったので、大変おもしろく拝見させていただきました。

それから、興味を持ったのは、彫金の石膏型というのでどういうものかと思ったら、教えていただいたのですけれども、彫金というのは鍍金で小さいものをつくって、あとは鑿でかんかん彫っていくわけですね。だから、型でつくれないので何かと思ったら、そのまま売ってってしまうものを石膏型で残したということなのですね。非常におもしろいなど。

当時の彫金で、この府川さんという人は知りませんでしたけれども、水戸金工というものがあって、茨城の水戸で水戸光圀以来ずっと金工の伝統があって、廃藩置県で藩がなくなって食べられなくなるので東京へ出てきて水戸金工と称して、ずっと何代も水戸金工と言って、今でも茨城の公園に行くと水戸金工の碑があったり、実際にやっているのは東京なのですけれども、水戸出身というのを忘れないでやっていく一連の人たちがいるのです。それとの関連でもおもしろいなど。岡倉覚三と書いてあったり、榎本武揚が東京彫工会の会頭だったというのを初めて知りましたが、おもしろいなどというふうに思いました。とてもいい資料だと思います。

それから、夜着は先ほどおっしゃっていたように、どう見ても日本の伝統的な鳳凰の格好ですね。羽だけが孔雀という実におもしろいミックスしたといえますか、余りそういうことを疑問にも感じないでどんどんつくってしまったと思いますけれども、ああいうものもおもしろい。

それから、うちは陶芸美術館なのですけれども、他の工芸も一つ一つ紹介していくというのでガラスをやって、金工をやって、今ちょうど茨城の染織というのをやっています、土浦市の博物館に、それこそこと同じような雛形が大量に保存されていて、それを今、一部を借りて展示しているのですけれども、話によると全国でそういうことをやって

いたという話だけは聞いていまして、この間知事が代わったばかりで、新しい知事が来られて見ていたら、うちにもあったよというようなことをおっしゃっていましたので、今日まさにいい見本を見せていただいて、この安藤さんという人がやり方を創始されたのでしょうか、何かそんな話を聞きましたけれども、そういうわけではないですか。この作者がああいうやり方を創始されたのですか。

**植木委員：**渡邊辰五郎という。

**金子副委員長：**ああ、そうですか。それも今日初めて知りましたけれども、ちょっと関連がありますので、うちの学芸員にも様子を見せたいなと思っていますので、何か資料でもいただけるようなものがありましたら、ぜひお願いしたいと思います。

長くなってすみません。以上です。

**大口委員長：**それでは、順番ということで私も一言申します。

歴史関係では幕末関係のものが幾つか気になりました。1つは先ほどからお話しになっている東海道五十三次を長州征伐で行く歩兵部隊と絡めた五十三次、これは浮世絵のそういう立地的な性格が出ているものだというお話がありましたけれども、実は私がたまたま前に調べた古文書資料、東海道の今の茅ヶ崎周辺の村の資料ですけれども、その村の知行主である旗本がこの時点で動員をかけられて大坂にまで下っていく。行くのに際して村の名主が後を追いかけて藤沢の泊まっている宿屋へ行って「殿様、御苦労さまです」と挨拶をしているわけです。そういう古文書を念頭において、この浮世絵をみると、今で言えば写真がそこに載るような感じでとても興味がわきました。恐らく江戸時代を通じてそれだけの旗本以下の武士が江戸から関西に下るとするのは初めての経験なわけですから、これはたまたま私が調べたところだけではなくて、そこにはたくさんのドラマがあったわけで、そういう文書資料との絡みもこれから出てくるのではないかという思いがしました。

もう一つは幕末のことで、横須賀製鉄所の視察でフランスとイギリスへ行った使節の写真が載っておりましたけれども、私、たまたま横須賀製鉄所の歴史というのを自治体史の関係で調べたことがあるので、この使節が行ったことも文書資料では見ておりました。

その首席の柴田日向守というのも歴史に名前が残っておりますけれども、文書資料ではなかなかその下の部下たちで誰が行ったのかということまで出てこなかったのですけれども、ここでは福地源一郎という明治以降も名を残す人間が一人写真に残っていましたが、その他の3人に関してはほとんど身元がわかっていないのではないかと思います。今後まだまだいろいろな方面から関連調査ができる人物ではないかと思っています。

そういう意味で言うと、歴史の表には出てこないけれども、中級・下級の武士たちが、例えば由緒書という形で今日も2点ほど出ていました。1つは梅屋敷の安藤、それから、禁裏の絵図を描いたという辻何がしという人の由緒書が出ていました。これは今で言えば先祖書と履歴書をあわせたようなものです。下級の武士・役人の由緒書は、恐らくこの博物館でもこれまでも幾つも収集していると思うのですけれども、これまで活用資料ではなかなか出てこないものがまだまだ出てくるのではないかと思って興味深く見ました。

それから、昭和になりますと今泉家の宅地開発の資料がありまして、これは昭和6、7年だというお話でした。近いところだと思いながら我々は東京がどうやって宅地として開発されていったのか知らない。たまたまテレビで田園調布の開発のさまを見ましたけれども、あれなんかも我々は最初から高級住宅地という印象を持っていましたが、分譲したときは普通のサラリーマンだったということを強調していました。東京郊外の住宅地がどのように開発されたのかを研究していくのはこの博物館が一番適当だと思います。

それから、昭和でもう少し下ると、先ほども出ましたが、昭和20年で集団疎開の壮行会のな写真が1枚ありました。また私事ばかりで申しわけないのですが、集団疎開の一員としてあんなに立派な壮行会は開いてもらえなかったのですが、恐らく当事者にとっては大きな記念写真。

それから、それと関連して風船爆弾の写真もありました。これもまた身近なことで云えば、私の姉が女学校の多分低学年の1年か2年のときに風船爆弾動員で日劇に行ったという話は聞いていました。今までそういう情報は知っていましたが、きょう風船の写真があって、そこに人が立っているの、その大きさもわかるわけですが、そういう映像で見るとまたすごく衝撃が大きいので、あれで太平洋をどこまで飛んでいったのかという思いがいたします。

感想めいた話ばかりで申しわけないけれども、今日いろいろな形で見たのは、我々の生活のあらゆる部分の非常に細かいひとこまでありますけれども、そういうものが集まっていくと歴史の全体をうかがうための重要な資料だなという感想を持ちました。

以上です。

神谷先生、お願いします。

**神谷委員：**たくさんあって半分くらいはまだ見ていませんけれども、絵のところで私の気づいたところを言わせていただきます。

1番の浅草寺は皆さんコメントされていますけれども、豊春の大変大型の肉筆資料ということで、それだけでも大変貴重なのですが、長らく行方不明であって、昔のモノクロの浮世絵の図録に載っていて、それが久々に出てきたということでそれだけでおもしろいのですが、あのタイプの絵というのは何か目的があって多分描かれているのだらうと思います。やはりその目的がお堂の提灯に描いてある「豊竹肥前」という義太夫の人が何か関係しているのかなと想像もしましたけれども、その辺が少しわかってくるとおもしろいなと。

それから、描き方といいますか、透視法のばらばらなのは、これはそういうものですが、人物、その他のところで弟子たちとみんなと一緒に描いているのではないかなと、そういうことも思いましたし、落款の入れ方も「先生、できました」と言って落款を入れるような、これは想像ですが、そのあたりを調べていただくと制作過程もわかってきていよいよ使える資料になるのではないかと思います。

それから、是真是なかなか気の毒な人で、工芸と絵があって、時代は江戸と明治の両方

やっているのをついつい落ちてしまうのですね。きちんとやるべき人だと思いますし、時々そこに挑んで展覧会をやるとてもおもしろい展覧会をしてくださるのですが、その制作に係る資料ということで、あれだけですと研究資料にしかありませんけれども、何とか江戸博でも作品の完成したものを積極的にコレクションしていてもいいのではないかと思います。

あの手のものというのは収蔵庫の冷蔵庫でいつまでも眠らせていてもしょうがないわけで、誰かが料理をして料理人が出てお客さんに食していただくというそこまでやっていたくとうれしいなと思います。

幕末・明治というのは、そうやって幕末と明治と私たちはついつい分けてしまうのですね。ジャンルも大変広くやっているめちゃくちゃなテクニシャンですから、ぜひスポットを当てていただきたいなと思いました。

それから、「末広五十三次」から中村芝翫はどちらもおもしろい資料で、末広のほうは、東海道五十三次というのは広重が、早くは北斎が始めたのですけれども、広重が保永堂版で当ててからいろいろな種類がアイデアで出されますね。東海道五十三次だけではなくて木曾街道だ何とかととにかく出されて、出せば売れる、ネタを待っている、そこにちょうどいいネタというふうに多分版元は反応したのかなと。特に江戸の人たちには反応があるということで出されたのかなと、これも想像ですけれども。

ただ、こういう時事性のものというのは、例えば明治になって実際に誰それが来てどこへ歌舞伎を見に行ったというのは翌日もう出版される。スピードが第一なので、13の版元で8人の絵師でやったというのは恐らくそういうことが関係しているのかなと。「3年前に長州征伐で行列が行ったよ」ではニュースにならないので、本当に即時性を求めるためにたくさんの人が寄って、55枚ですから相当な手がかかると思います。これも想像ですけれども、そういうことも少し思ってみました。

あと、作品としてはそれを達成するための作家の対応の違いみたいなものが、山梨さんがおっしゃったように、いろいろな角度から透けて見える。真剣に描く人もいれば、多分通り一遍の描き方で、その絵師たちは行列を見ていないわけですから、話だけで描かざるを得ない。それをどうやって対応したかというのもおもしろいテーマになるかなと思います。

あと、9枚のセットは状態もとてもいいですし、状態も割と早い頃なのでありがたいなと思います。セットで出ると、これは特にマニアには自慢できますから、博物館や美術館でやっていて悔しいのは、マニアが俺は全部持っているぞとか、そう言われるのが一番悔しいのです。持っていて大したことはないのですけれども、それが絶対的な価値ではないのですけれども、その人たちに対して「私たちもちゃんと持っています」と。そういう意味では、中身のクオリティーも高いので、これはありがたい資料だと思います。

以上です。

**大口委員長：**ありがとうございました。



では、松尾委員、お願いします。

**松尾委員**：歴史資料につきましては先生方がおっしゃったことと重なるかと思うのですが、やはり「浅草寺図」が私もまず第一に目に飛び込んでまいりまして、大変細かい描写で楊枝を売っていたお店だそうですが、あるいはコウノトリなどの鳥もいろいろ描かれていて、今までこういう「浅草寺図」を見たことがなかったので興味深く思いました。

恐らく浅草寺の図は他にもいろいろあると思いますし、あるいはまた、文献資料も浅草寺関係はたくさんあるのではないかと思うので、それらのものとあわせて比較研究されていつの時代のものであるとか、年代の特定までは難しいかもしれませんが、目的であるとか、描かれた背景を考えることができるのかなと思いました。

あとは、いろいろおもしろい資料が多かったのですけれども、「亀戸梅屋敷関係資料」がなかなか充実しているなと思いました。看板とか鑑札とか、あるいは梅屋敷のあるじでしょうか、幕府の御用を務めていると。先ほど大口先生もおっしゃいましたように、由緒書などもそろっておりますし、これらの資料をぜひ展示に活用していただけたらいいなというふうに思いました。

というのは、広重の「名所江戸百景」や、何ととってもゴッホが広重の絵を模写しているということもありますから、ゴッホと広重とこんな資料を並べたりして展示したらかなりの迫力、ゴッホの絵を借りるのは大変でしょうけれども、そういうようなことをちょっと思いました。

あとは、個人的な関心事では、御家人の資料で由緒書とともに禁裏絵図、それから、拝見しませんでしたけれども仙洞御所の絵図もあるということで、それらの絵図は寛政2年ですから京都の天明の大火の後、大名のお手伝いなどによって再建された御所ですけれども、それらの御所の絵図は江戸博にはなかったということなので収蔵されて良かったなど。

そして、御所の絵は、瓦ぶきとかこけらぶきとか屋根の区別が色分けでしてある。恐らくこういう屋根の区別が非常に詳細な絵図というのは他にあるのかどうなのか、もしかしたら辻という御家人が携わった仕事などとの関係があるのかなというふうに思った次第です。

あとは、近代の先ほどの今泉邸関係資料、大口先生のお話のように、江戸時代の大名屋敷がどういうふうに近代に変化していったのか、そして現在はどうかというこの地域の変遷をたどる良い資料ではないかと思いました。何ととっても昭和7年には127坪の土地が500円だったというのも大変具体的で、興味深い資料だと思います。

あとは、史実的にはいろいろ興味のある資料はありましたけれども、慶応元年の遣欧使節の肖像写真もそうですが、他の美術館あるいは博物館などと共同してさらに研究が進められる、江戸博は江戸博としての独自性というのも重要なことだと思いますけれども、他館とともに研究を重ねていただけたらいいなというふうに思いました。

以上です。

**大口委員長**：ありがとうございました。

最後になりましたが、中村委員、お願いします。

**中村委員**：皆様からのご指摘に付け加えることはございませんが、今回は寄贈による収集資料の案件が出されまして、生活民俗に関する資料がかなりありましてよかったですと思います。寄贈資料にありました裁縫雛形は裁縫教授法として生まれ、東京家政大学に保存されている資料は重要民俗文化財に指定されておりますが、かつてそこで学んだ生徒さんからの寄贈ですのでその実践例として興味深く拝見しました。

生活民俗資料の収集は寄贈によるところも大きいと思いますのでお尋ねですが、現在どのくらいの寄贈の申し出があるのか、また購入については「収蔵品購入に関する方針」が設定されておりますが、寄贈についてはどのような基準、手続きでお進めなのか等、寄贈の現状についてお教えいただけましたらと思います。

**大口委員長**：ありがとうございます。

それでは、今、中村委員から質問がありました、何か。

**飯塚事業企画課長**：方針でございますけれども、まず、購入につきましては29年度の方針に基づいて、それに合った資料を収集しております。

また、寄贈資料につきましては年間60件ぐらい通報がございまして、全てを受け入れるということは難しく、といたしますのも、江戸東京の歴史と文化に合致したものを収集することと、もう既に収集しておりますものもございまして、特に生活民俗にかかわるものと、火鉢やミシンといったものは既に収集しておりますので、そういったものは原則としてお断りしております。

**中村委員**：今後も皆さんから寄贈いただけるよう広報も含めお進めいただきたいと思ます。

**藤森館長**：先ほどの委員から出た屋根葺き材が描いてあったという、あれはこの模型も武家屋敷は全部相当正確に屋根葺き材を復元した。それは、お寺なんかはないのですけれども、大名屋敷になりますと葺き材が格式を示すのです。一番格が高いのは檜皮葺きなのです。だから二条城の御成門だけを、お城で檜皮葺きなんてやってどうするのだと思ますけれども、天皇が入るので、一番高いのが檜皮で、ただ、それは生活部分であって、あれを見るとどう管理されていたかがわかるわけです。瓦屋根は一般的だとか、その次がこけら葺きといって割った板を張るのです。それは知っていたのですが、あれは木賊葺きという信じがたいものがあって、見ましたら物置なのです。だけど、木賊で屋根を葺いてどうするのだという、恐らく茅葺きよりも格が低いというか、木賊で葺いて閉じられていますけれども、雨がどうなるのか。だから、あれは基本的には用途の格式を示すために一目で見るとここは天皇が来たら入るなとか、将軍が来たら入るなとか、そういうために割合一般的なことでございます。

**松尾委員**：ありがとうございます。

**小島委員**：当館にある内裏の図も同じような屋根によって色分けしたもので、やはり檜皮葺きが赤で描いてあったので、恐らく一つのスタンダードな内裏の図の描き方なのではないかと思ます。

**松尾委員**：御家人が京都に出張して何らかの形で手に入れたものなののでしょうか。何らかの役務で手に入れたものというふうに見たのですけれども、そうではないということかもしれませんね。ありがとうございます。

**大口委員長**：他には特にございませんでしょうか。

それでは、今日ここで議題に上がった資料について、この委員会として全体を収集することを承認するというところでよろしいでしょうか。

（「異議なし」と声あり）

**大口委員長**：では、委員の皆様の賛同を得たということで、収集を承認することにこの委員会として決定いたしました。

これをもちまして、本日の審議を終了したいと思います。どうもありがとうございました。

**富岡文化施設担当課長**：大口委員長、金子副委員長、どうもありがとうございました。

本日の部会の議事録につきましては、冒頭でも申し上げましたけれども、収集資料決定後に公開を予定してございますので、内容につきましては事前に確認をさせていただきますので、どうぞよろしく願いいたします。

それでは、これをもちまして、「平成29年度第2回東京都江戸東京博物館資料収蔵委員会 資料収集部会」を終了いたします。どうもありがとうございました。

午後0時1分閉会

以上